〈協同のひろば〉

見えてきた協同のネットワーク

―「第２回協同のための北海道集会」の概要―

宮崎　隆志（北海道／北海道大学）

1．集会の概要

1993年に開かれた協同のための北海道集会は、その後に北海道労働者協同組合を誕生させ、また老健施設の管理をめぐる道北勤医協との協力を実現するなど、北海道における労働者協同組合運動の前進の条件を切り開く意義をもった集会であった。しかし、他方では「こんなにたくさんの協同があることに驚いた」という感想に示されるように、参加者の多くにとっては道内の多様な実践の存在を知るに留まり、相互に共通する実践課題や抱える悩みについて交流するまでには至らなかったことも否めない。今回の集会を開催するにあたっても「集会の目的は何か」という問いが実行委員団体から何度か発せられたことも、前回集会の到達点を示すものであった。

第２回集会の開催にあたっては、以上のような前回集会の到達点を踏まえ、さまざまな実践者同士が共に語り合い、共通の課題を発見し、相互の新たなネットワークを形成する現実的な力を形成することに最大の注意が払われた。「協同のネットワーク化」という今集会の主題は自ずと設定された。

集会は1995年12月に北海学園大学において２日間にわたって開催された。参加者は延べで72団体、346人で第１日目には全体集会、第２日目には分科会が開催された。全体集会は池上惇氏の記念講演「協同で切り開く地域づくり・仕事おこし」および「協同のネットワーク化で切り開く地域づくり」を主題とするシンポジウムより構成され、分科会は「地域づくりと協同組合」、「非営利・協同の経営問題」、「高齢者・福祉・医療の協同」、「教育・子育て・文化の協同」の４つが設けられた。

また本集会に先だって、旭川と札幌でプレ集会（地域集会）も開催された。これは参加者の掘り起こしとともに、各地域に密着した交流とネットワーク形成を主眼とするものであったが、地域の共通課題の確認やその後の実践上のつながりを展望する上で大きな意義をもった集会であった。

2．成　果

報告や討議の詳細は、後に刊行される報告集を参照して頂くこととし、ここでは全体的な特徴点を指摘するにとどめる。

第一に協同による仕事おこし、地域づくりの可能性とその意義が記念講演によって明確にされ、各分科会で事例に即してさらに深められたことがある。池上氏は仕事おこしは様々な実践の経験・ノウハウなどの知的資産を理論化し、継承・交流する人間ネットワークなしには展望しえないこと、あるいは生活の質を高める欲求の増大は新しい仕事おこしを求めているが、それに応えるには芸術的センスをもち公共性を有する担い手がふさわしいことを指摘され、現代社会に大きく開かれた協同組合（労働者協同組合）の可能性を明示された。この講演は参加した実践者が、自らの実践の社会的客観的な意義を改めて理解する契機になったし、また翌日の分科会討議とも呼応して、各々の実践を貫く「赤い糸」として労働者協同組合が存在することを浮かび上がらせるものであったと思われる。集会全体のまとめは行われなかったが、今回の集会の討議を通じて、この集会の目的が参加者に確認されたことが最大の成果であったと言えよう。

第２に、様々な協同の実践のネットワーク化が必要であることが参加者に自覚されたことも大きな成果であった。「数えてみたら下川の中に６つ

も協同組合があった。その組織化をさらに進め、地域内でのネットワークを作っていきたい」(下川町森林組合・山下氏）といった発言に象徴されるような新たな実践課題の発見がなされたことは、実行委員会の願いであったとは言え、極めて感銘深い。

第3に、各個別分野の実践を進める上でも、この集会の討議が大きな意味をもつことが参加者の確信になりつつあることがある。非営利・協同の経営問題を主題とする第二分科会では、経営の民主性と事業体としての効率性をどう両立させるのかという論点について集中した議論がなされたが、教育、福祉、旅行事業、食品産業と全く領域の異なる諸実践であるにもかかわらず、すべての実践に共通し、かつ最も本質的な問題を取り上げて議論できることが、この集会の重要な特徴の一つであろう。このような点は第4分科会でも同様である。「非常に勉強になりました」(くみあい食品)、「今まで、これほど深い意味で協同をとらえてはいなかったが、これからの活動をしていく上での意識が強まったように思う」(さっぽろ子育てネットワーク）という感想を、私たち実行委員は文字どおりに受け止めても許されるであろう。

第4に、北海道で未開拓な実践領域を切り開く重要な歩みを進めたことも確認しておかねばならない。第3分科会では「北海道においても高齢者協同組合が必要なことを参加者が確信し、また実際にスタートさせることが確認されたように思われる」とのまとめがなされているが、全国の経験に学びながら、北海道での新たな実践課題を様々な領域の実践者が共通に確認することの意義は大きい。

3．今後にむけて

以上のように第2回集会は、北海道の地域づくり・仕事おこし、さらには労働者協同組合運動の発展にとって、極めて大きな意義をもつ集会であった。要約すれば、労働者協同組合の提起する実践の論理が、様々な分野の実践の交流を通じて、それぞれの実践者の内側に発見され、自覚される集会となりつつあるように思われる。換言すれば、個別分野の実践の総括を通じて協同の実践計画を見いだすことのできる集会が生まれつつある。

このような単なる研究集会ではない実践的な集会の積み重ねの上に、北海道の地域づくりの新たなうねりが生じることを予測することは、もはや夢ではない。それほど遠くない先にこのことは実証されるであろうし、またそのために実行委員一同は更に力をあわせる決意である。全国の皆様の支援を是非ともお願いしたい。

〔注〕

「第2回協同のための北海道集会」の報告集が実行委員会によって後日刊行される予定です。